大栗裕の採譜の実際 - 「大栗文庫」所蔵資料の 2015 年度再調査報告を中心に

白石知雄（大阪音楽大学）

大阪音楽大学付属図書館は、大阪出身の作曲家、大栗裕の自筆譜などの資料を「大栗文庫」として所蔵していたのですが、この 4 月に、遺族と大学が協議した結果、他の団体への譲渡が決まりました。詳細は近日中に情報公開されると思いますが、私は、遺族から委託されて、資料移転のための準備作業を現在も続けています。この 11 月には完了する予定です。その作業のなかで、ちょっと珍しいかもしれない資料が見つかりましたので、今回は、そもそも大栗文庫とは何だったのか、ということを含めて、概要を発表させていただくことにしました。

1. 大栗文庫について

まず、大栗文庫についてご紹介します。

1982 年 4 月 18 日に大栗裕は 63 歳で亡くなりました。

告別式は、彼がかつて首席ホルン奏者をしていた大阪フィルハーモニー交響楽団の関係者が取り仕切ることになり、指揮者・朝比奈隆の名前で、各方面に資料の提供を呼びかけられました。これを大阪音楽大学に集約したのが「大栗文庫」です。

集められた自筆譜は、主に吹奏楽作品の出版、貸出に活用されました。吹奏楽指導者の辻井清幸と木村吉宏が大阪音楽大学の教員だったことが決定的であったと思われます。没後 10 年目 1992 年には木村が団長をつとめる大阪市音楽団が記念演奏会を開き、翌年 CD を作成します。そして大阪音楽大学は、創立 90 周年記念事業のひとつとして、「大栗裕の世界」という演奏会を開催しました。

そして辻井、木村が退職した時期とも重なりますが、2007 年に、これまで寄託されていた資料が正式に大学へ寄贈され、大阪音楽大学は、資料の保管状況を改善するために、専用の部屋を設けて、資料のデジタル化に着手します。

一方、そもそも「大栗文庫」設立のきっかけを作ったのは、大阪フィルハーモニー交響楽団の関係者だったわけですが、大阪フィルでは、2001 年にナクソスから作品集の CD を発売、2007 年に、埋もれていた作品を発掘して演奏会を開催します。

そして今年 2015 年の 4 月に、所定の目的を達したということで、新たな枠組みで次の

段階へと進むために、資料自体を別の団体に譲渡することになったわけですが、それでは、そもそもどういう資料が所蔵されていたかというと、これまで主に楽譜資料が活用されてきましたが、2007 年以来のデジタル化を中心とする整理作業のなかで、楽譜以外の資料の重要性が浮かび上がってきました。

具体的には、

第 1 に、どういう作品なのか特定できないものを含めた草稿・スケッチ。

第 2 に、大栗裕自身が所持していたり、のちに大栗文庫に寄贈されたりした演奏会プログラムをはじめとする様々な印刷物やその他の紙の資料。

そして第 3 に、オープンリールテープやカセットテープなどの録音資料などです。

今回、私がご紹介するのも、雲水讃という作品の草稿です。大栗文庫に保管されている草稿の多くはバラの五線紙ですが、その他に、リングでたばねたスケッチブックの体裁の楽譜帳が 8 冊保管されています（A4 サイズの各ページに五線を 21 段印刷）。そのなかのひとつから、交響管弦楽のための組曲「雲水讃」という 1961 年の作品のスケッチが見つかりました。

2. 交響管弦楽のための組曲「雲水讃」（1961）の草稿について

まず「雲水讃」がどういう曲なのか、ということですが、これは、昭和 31 年 1961 年の文部省芸術祭参加作品として、朝日放送のラジオ放送で初演されました。その録音も大栗文庫に残っておりますので、放送の冒頭の解説をおききください。

♪初演放送冒頭のアナウンス

全部で３楽章の組曲だということ、そして、京都の吉祥院天満宮と西方寺で取材した素材にもとづいている、とアナウンスされています。

しかし、この説明はあまり正確ではありません。

吉祥院と西方寺の芸能というのは、具体的には毎年、夏の地蔵盆の時期に京都の市街地周辺部で行われる六斎念仏です。そして、第1楽章と第3楽章は六斎念仏の素材を用いていますが、第2楽章は御詠歌の管弦楽編曲です。

また、京都の六斎念仏は、複数の集落で伝承されて、それぞれ少しずつ形が違うのですが、この作品で使われているのは吉祥院の六斎だけで、西方寺に取材した素材がまったくみつかりません。別途入手した資料によると、1960年頃、西方寺では六斎念仏が中断して行われていなかったようなのです。ですから、そもそも取材が不可能だったはずなのです。

この「雲水讃」という作品は、このように成り立ちに不明な点があるだけでなく、放送初演のあとで改訂されて、全3楽章が2つ楽章に圧縮されています。そのため、残された楽譜や録音、資料の扱いに注意が必要なのですが、事情を整理するための出発点になるのが、この作品と吉祥院六斎念仏との関係です。

大栗文庫には、今おききいただいたテープのほかに、「六斎念仏」と箱に手書きされたテープがあり、内容は吉祥院六斎念仏の録音です。また、楽譜資料としては、自筆のスコアと複数セットのパート譜が残されています。既存資料の概要は既に2010年の大阪音楽大学研究紀要で報告しておりますので、ここでは結論だけを簡単にご紹介したうえで、新たに楽譜帳が見つかったことで付け加えうることを述べてみたいと思います。

2. 「雲水讃」草稿を含む楽譜帳の概要

京都の六斎念仏は、六斎日に唱える念仏から派生した芸能ですが、今では、最初に直立不動で所定の文言や念仏を唱える以外は、笛と太鼓を使った世俗的なパフォーマンスに終始します。吉祥院で伝承されている演目と、大栗文庫の六斎念仏の録音、そして雲水讃という作品の関係については表1でご確認ください。

この表を詳しく解説している時間的な余裕はなさそうですので、適宜参照する、ということで、早速、新発見の楽譜帳を見ていきたいと思います。レジュメの表3をご参照いただきながら、お聞きいただければと思います。

INDEXのページに楽器の編成表のような書き込みがあります。「序奏　主題　第1変奏　第2変奏　第3変奏」と書かれていて、実現しなかった作品のアイデアだと思われます。五線紙の第1ページは、なぜか黒田節の一部が書いてあります。第3頁に進むと、「黒田

節 Tango」「子守歌 Bolero」などと書いてあり、民謡メドレーの草稿だとわかります。これが 18 ページ続きまして、第 19 頁は「快」と「現世の音楽」という謎めいた書き込みのある別の曲の草稿。そして第 20 頁から第 34 頁が、六斎念仏の採譜です。

細部の冒頭がレジュメの譜例 1 です。これを大栗文庫テープに収録された六斎念仏冒頭の演目「発願」に相当します。

♪吉祥院六斎念仏「発願」録音

譜例 2 は、この採譜と完成した「雲水讃」の冒頭を並べたものです。さきに冒頭のアナウンスだけを聞いた初演の録音と照合してみてください。

♪雲水讃第 1 楽章　初演録音

採譜時の装飾音符が付点リズムに書き換えられていること、楽器の割り振り、表情付けなど、語りうることは色々あると思いますが、先へ進みます。

実は、この録音は、歌の最初の部分が切れています。私が実際に 2010 年に収録した同じ箇所の録音をお聞きください。大栗裕が聞いた録音は最初の２つのフレーズが欠けているのですが、おそらくそのことに気付かずに、そのまま採譜・作曲したようです。

しかしこのように、音源の欠落をそのまま踏襲してくれたおかげで、この録音と楽譜帳こそが「雲水讃」という作品の素材であって、これ以外を使っていないことがはっきりします。

楽譜帳には、六斎念仏の音曲もしくはその一部がこのあと全部で 8 点、採譜されています。残念ながらこのうち半数は、まだ解読できていませんので、それは今後の課題として、先へ進みます。

採譜は笛と太鼓を２段もしくは３段に記載していますが、第 35 頁で楽譜の景色が変わります。おそらく雲水讃第 3 楽章の自作主題のスケッチだと思われます。完成した作品にこれとまったく同じ箇所が出てくるわけではありませんが、リズムの扱いが酷似しています。

♪雲水讃第 3 楽章　初演録音

そして第 36 頁から第 2 楽章のための御詠歌のスケッチに入ります。

3. 大栗裕と「ニューリズム」

以上が、この楽譜帳の概略です。この作品は、フォークロアを素材とする広い意味での「編曲」と言いうると思いますし、ご覧いただいた採譜は、いかにも西洋音楽の訓練を受けた音楽家の「編曲」のための準備作業であり、その域を越えるものではないということで話が終わってしまいそうではあります。素材の録音の不備をものともせずに、作曲者は、愚直に録音を採譜して、その採譜された五線の譜面をオーケストレーションしてゆきますが、ここでは２つのことを補足的に指摘しておきたいと思います。

ひとつは、六斎念仏という芸能を特徴づけていた「踊り」はどこへいったのか、ということです。

ここまでお聞きいただいた「発願」の部分は直立不動で歌われますが、続く「つつて」という曲に入ると、演者は「豆太鼓」と呼ばれる手持ちの太鼓を上下左右に振って、踊り始めます。

♪吉祥院六斎念仏「つつて」

京都の六斎念仏は、なによりも、太鼓の芸能です。大栗文庫が所蔵する録音テープには、現在では伝承が途絶えてしまった昭和 30 年当時の技巧的なパフォーマンスも収録されています。「盛衰記」と呼ばれている曲です。

♪吉祥院六斎念仏「盛衰記」

また、吉祥院の六斎念仏は、芝居仕立ての演目が特徴だとされています。能や歌舞伎から取られたと思われる「安達ヶ原」という曲は、面をかぶった演者が加わる舞踊劇になります。まず 2010 年の芸能の映像、続けて「雲水讃」の該当部分をお聞きください。

♪吉祥院六斎念仏「安達ヶ原」

大栗裕の作曲は、メロディーの滑稽な味わいを誇張して、管弦楽曲としては面白く成立していますが、それでよかったのかどうか。

吉祥院の六斎念仏は、かつては稽古が厳しく、一糸乱れぬパフォーマンスは様々なコンテストで好成績を得ていたようです。

引用１としてレジュメに載せていますが、2000 年代初めに吉祥院六斎念仏を社会研究の視点から調査した相原進は、「昭和 30 年のマンボブームの時期に、打つ早さ[ママ]を重視した吉祥院六斎を揶揄して「マンボ六斎」と呼ぶこともあった」という発言を紹介しています。もしかすると、昭和 30 年代に吉祥院の六斎念仏が注目を集めたのは、マンボブームという背景があったからなのかもしれません。

しかし彼がマンボやラテン音楽への関心を表に出すのは 1970 年代に入ってからです。

♪神話

1973 年に大阪市音楽団創立 50 周年を記念して作曲された「吹奏楽のための神話〜天の岩屋戸の物語による」という作品です。アメノウズメがコンガのリズムで踊ります。この作品の打楽器の用法は吹奏楽関係者の評判を呼んだらしく、大栗裕は、同年 12 月には吹奏楽雑誌『バンド・ジャーナル』に「作曲家からみた打楽器」という文章を寄稿しています。

輪島祐介が近著『踊る日本歌謡』で日本におけるラテン音楽の系譜を追っていますが、山本リンダ全盛の 1973 年にラテン楽器を日本神話に導入した大栗裕は、残念ながら昭和 30 年代の「マンボ六斎」では、まだ踊り狂うことができなかったようです。

4. 大栗裕とバルトーク

そして最後にもうひとつ、述べておきたいのは、大栗裕とバルトークの関係です。

「雲水讃」という作品は、これまでむしろバルトークと結びつけて語られてきました。

1962 年 3 月 20 日の「関西音楽新聞」には、ドイツ、イタリアへの指揮旅行から帰国した朝比奈隆の次の談話が掲載されています。引用２です。

>>

　朝比奈隆氏談　[……]大栗君の作品は各地で好評でした。特に各楽団の受取り方が非常によくこの郷土色の強い「雲水讃」はイタリーでは「大栗・バルトーク論争」にまで発展しました。

<<

これを受けて、京都女子大学に提出した業績表で、大栗裕は「雲水讃」について自ら次のように書いています。引用３です。

>>

交響管弦楽のための「雲水讃」

初演指揮：森正　演奏：大フィル

ドレスデン、ハンブルク等にて朝比奈隆指揮で演奏、ローマに於てバルトークと比較され好評を博す。

<<

大栗裕は、没後、主に吹奏楽関係者の間で「大阪のバルトーク」と形容されますが、この２つの資料が、私の知る限り大栗裕とバルトークを肯定的に結びつけた最初であり、そこで具体的に話題になっているのは、他でもなく「雲水讃」です。

　しかし、実は大栗裕が自ら民謡や民俗芸能の録音・採譜を手がけたのは、「雲水讃」の前後数年の時期に限られます。吹奏楽文献では、「大阪のバルトーク」という言葉が彼の 1956 年の出世作「大阪俗謡による幻想曲」と結びつけて語られますが、この曲を朝比奈隆がベルリン・フィルと演奏した際の批評は、正確には次のようなもので、むしろ、バルトークを安易な連想することを戒める文脈が構築されています。引用４です。

>>

　芥川也寸志の「絃楽の為の三楽章」を関西交響楽団の指揮者朝比奈隆が音楽院ヨールで指揮したが、ヒンデミットとバルトークの影響の他に性格的にプッチーニ的（プチネスケ）音（クランクフォルム）が認められる。

　大栗裕の「大阪俗謡による幻想曲」は前者とは全く別個の趣きがある。

　此所にもバルトークの影響を指摘する人もあろうが、此の曲では模倣よりも我々に近い音楽感覚に献身している事がうかがわれる。
<<

　そして作曲から 20 年後、1976 年に FM 大阪が制作した大阪フィルハーモニー管弦楽団創立 30 周年記念番組のインタビューで、バルトークの名前こそ出していませんが、大栗裕は、「大阪俗謡による幻想曲」が大阪の祭り囃子を「記憶で書いた」のであって、「採譜ではない」ことを明言しています。

♪大栗裕インタビュー録音

実際、ここに出てくるだんじり囃子は、チャンチキを使ってはいますが、リズムは天神祭のそれとは別物です。

♪大阪俗謡による幻想曲

また、1965 年以後、大栗裕は何度か大阪の民謡・わらべうたを用いて作曲しますが、このときには、高槻在住の民話研究家、宇津木秀甫の協力を得たようです。
　そして 1970 年代の大栗裕は、先の「神話」もそうですが、古代や中世の、もはや音が残っていない題材をテーマに作曲することが多くなります。「バルトーク的」と言えなくもないフォークロアの取材・採譜は、彼のキャリアのごく一時期に限られた特徴です。

5. 結び

　以上、だからどうした、という結論ではありますが、「実際は何がどうなっているのか」資料研究というのはこういうものなのではなかろうか、ということで、ひとまず発表を終わります。